

人は清涼感を求めて水族館を目指す

日本に120施設ほどある水族館の中でも、中村元プロデュースの水族館は独特の展示が大人気。その秘密は、水の動きを見せることにあるのだとか。水の動きを見ると人は涼しさを感じるようだ。

photo: Kitehen Mminoru text: Ikuko Sonoda



泡まで見えれば涼しく感じる満足感が高くなるんです」

さらに水族館の魅力には、水中の命を感じられることにもあると中村さん。「人が生きていけない場所で、命が生きていることを見ると、『すごいなあ』と感動します」。水族館に行くのは、映画を映画館で見るのと、家で見ることのような違いがある。「映画館で映画を見ると、周りが暗いから、画面しか目に入らず映画に飲み込まれますよね。暗い水族館内でも、水槽の情報しか頭に入らない

から、水の中の不思議な世界に飲み込まれてしまうんです」

水の動きを見せて清涼感を演出

中村さんがプロデュースした水族館の中でも、水の見せ方に特にこだわった水族館を聞いた。

「まずサンシャイン水族館。天空のペンギンは都会ならではの面白い景色が楽しめます。ペンギンは広い海を自由に泳いでいるのが本当の姿なので、その海の広さをビルの上に広がる青空を借景にする

“ 青い色と水の動きを作ると冷たく感じる。だから水族館は涼しいと思われるんです ”

Hajime Nakamura

なかむら・はじめ

水族館プロデューサー。鳥羽水族館を退社後、日本で初めてフリーランスの水族館プロデューサーとなる。軽い気持ちで始めた「超水族館ナイト」は6月17日の開催で30回になる。記念の特別ゲストは『いたずらラッコのロッコ』の神沢利子さん。

人は暑くなると水族館に行くきたくなるらしい。「脳内で水が冷たくて涼しいって計算してわかってるからなんですよ」。こう語るのは水族館のユニークな展示で話題を呼ぶ水族館プロデューサーの中村元さん。

その中村さんが目指す水族館とは、実は水の見せ方にある。「水族館といえば海や川の生き物を見る場所と思うのが普通です。でも私がいつも心がけるのは、青い色を作る」ということなんです。海に潜ると、深くなるほど青以外の色がなくなって、太陽の光が届かない深海になるとほとんど黒の世界になる。だから人は青い色を見ると水を連想し、涼しいに違いないと、視覚と脳の経験で思うんです」。色には冷たさや温かさを連想させる力がある。暖色系の色を水に反映させればアマゾンの川など暑い地域を想像し、寒色系は透明感のある清流を思わせる。

清涼感を感じるヒントはほかにもある。「透明な水の中に水草がゆらんでいるとさらに涼しさを感じるし、そこに流れがあつて水の

ことで表しました。カワウソやペンギンが本当に住んでいる草原で展示しているのもこちらだけです。屋内ではさまざまなテクニクを駆使して、広くて清涼感のある水中世界を楽しんでいただけです。特に太陽光にあふれた白砂の海、サンシャインラグーンは大人がしつかり満足してもらえるクオリティです。北海道の北の大地の水族館は、滝壺の下に潜ってオシロコマを見上げる展示から始まって、湖を幻想的に表現した水槽では巨大なイトウが生きた魚を追って食べます。冬には氷が張る川の水槽も面白いですよ。広島のマリホ水族館は完全に都会のオアシス。ナイトアクアリウム、躍動する水塊、泡のトルネード、うねる溪流と、水の動きを楽しんでいただけると思います。私のプロデュースではありませんが、名古屋港水族館は圧倒的な水量のダイナミックさが魅力です」

水をどうやって見てもらうかに、中村さんはいつも頭をひねっている。次はどんな水を見せてくれるのか、楽しみだ。